

第一部 問題提起(1)

ポストコロナの世界経済・万博

日本総合研究所 調査部 マクロ経済研究センター所長 石川 智久

日本総合研究所の石川でございます。私は、今、マクロ経済研究センターの所長という立場でマクロ経済全般を見ております。その人間から見て、ポストコロナの世界経済がどのように変わっていくのか。また、そのなかで関西経済、万博がどのように変わっていくのか。それについて私なりの主張と問題提起をさせていただきたいと思っております。



石川所長

〔1. ポストコロナの世界経済〕

まず、ポストコロナの世界経済はどのように変化したのかについて、私なりの意見を述べさせていただきたいと思っております。

ポイントは、ここに書いてある4点になります。

一つは、世界経済の成長率が低下したということです。後ほど説明いたしますが、世界経済は2000年に入りまして20年間順調に成長してきました。リーマンショックがありましたけれども、そのときには、中国、インドの成長もありまして、世界経済全体自体は-0.1%しか落ち込んでいません。

でも、ご案内の通り、今、世界経済は大きく落ち込んでいる。これからどれほど挽回するのかというところなのですが、2000年から2020年までは中国経済が大体9%近く毎年成長していました。これから中国も少子高齢化の時代に入ります。また、金融のいろいろな問題があります。そういうことを考えますと、成長率はやはり2020年代は4~5%と、これまでの成長ペースの半減とならざるを得ない。これまでの成長エンジンであった中国経済がそれほど落ち込んでくると、世界経済もある程度成長が低下していくと考えます。


さて、世界経済は大体3%が景気後退の瀬戸際と言われます。中国の成長が落ちていくなかでは、2020年代の世界経済は3%から3%前半の、なかなか苦しいような、そうとは言っても悪くもないといった成長状態になると思います。そうしたなかでは、新興国を中心にもっと成長したいと思う国は何をするかということを考えると、乱開発などが進む可能性は否定できません。そういったことを防ぐことが、この2020年代にとってはとても重要になってくると考えております。

もう一つは、世界経済のなかで日本の相対的地位が下がっていくなかでは、やはりグローバル展開をしていくことがこれまで以上に求められる。そのなかでは、グローバルトレンドを知る必要があります。でも、グローバルトレンドというのはなかなか知ることができません。その一つの答えが私はSDGsになると思います。

SDGsは、国連が定めた2030年を目標にしたターゲットです。これが、今、世界の課題であるということをお考えますと、このSDGsにどれだけ対応できるかが日本企業のグローバル化を決めていくと考えています。


更にもう一つ、私がマクロエコノミストとして大変気になる動きとしては、世界的に資本主義の在り方を見直す動きが加速しているということです。これまでのように成長だけを考えた資本主義ではなかなか世の中は安定化しません。やはり成長と安定性、社会課題の解決の両面に配慮したハイブリッドな資本主義を世界に主張していく必要があると思います。わが国は、それを主張するに値する国であると思います。とくに関西は、いわゆる三方よし、売り手よし、買い手よし、世間よしという哲学を生み出した地域です。こういった成長と安定性、社会課題の解決を目指す資本主義をリードする、その先端地域になれるのは、まさにこの関西ではないかと考えているところです。

主張するだけで終わってはなりません。私たちは世界第3位の経済大国として、そういう世界をリードしていく立場になると思います。アメリカと中国が対立するなか、そこをうまく取り持てる国、まさにそれは日本だと思います。やはり世界のルール、スタンダード作りに積極的にかかわっていくべきではないかというのが、私がポストコロナで考えていく世界像でございます。この辺については、第二部の議論のなかで皆様のご意見を賜りながら深めていければいいのかなと思っております。



1. ポストコロナの世界経済

- 世界経済の成長率が低下。成長を挽回するために乱開発が進む可能性否定できず。
- 日本企業はグローバルトレンドを知る必要。その一つの答えがSDGs
- 世界的に資本主義の在り方を見直す動き。わが国は成長と安定性の両面に配慮したハイブリッドな資本主義を世界に主張すべき。
- 世界のルール・スタンダード作りに積極的に関わるべきである。

 次世代の国づくり

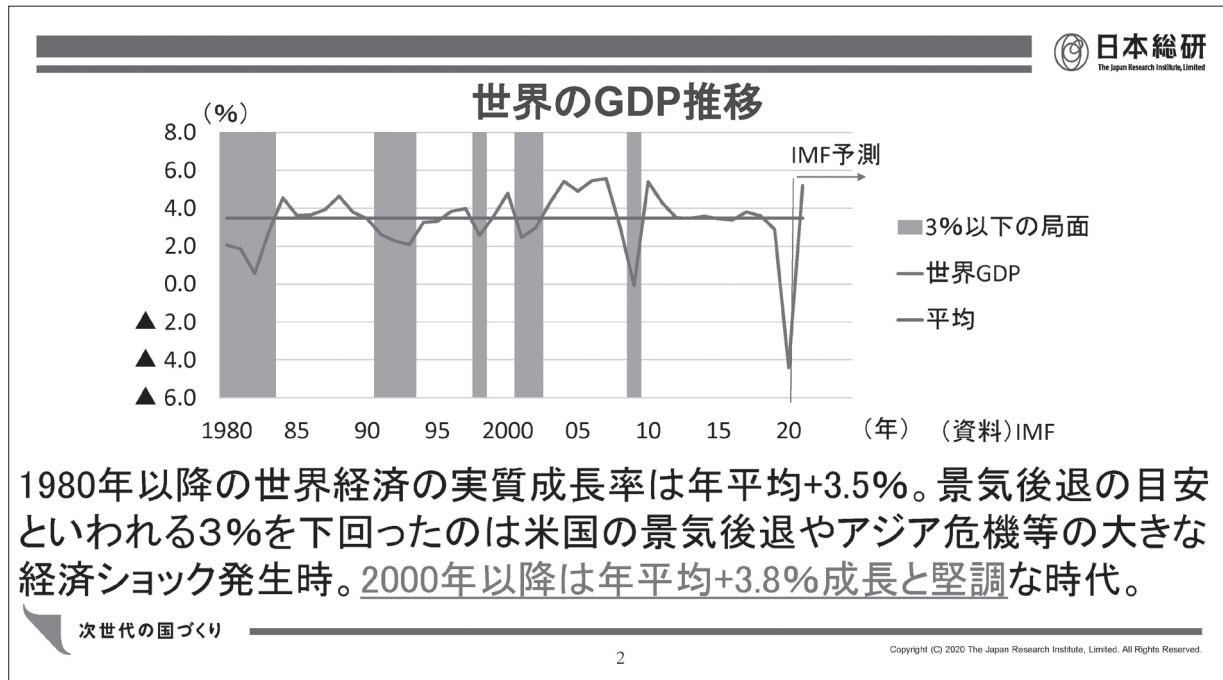
1

Copyright (C) 2020 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

〔世界のGDP推移〕

では、世界経済3%が景気後退の瀬戸際だというような話をする際に、ある程度知識を整理していきたいと思えます。1980年以降、世界経済は年平均3.5%を維持してきました。そして、3%を下回ったのは、アメリカの景気後退やアジア危機などの大きな経済ショックが発生したときのみです。1980年以

降が3.5%であったのに対して、2000年以降は年平均3.8%成長と、かなりいい時代が続いてきたと考えています。しかしながら今後は、先ほど申し上げました新興国、中国などが成熟化していくなかでは、成長率が3%まで落ちていくことは十分考えられる状況になっています。



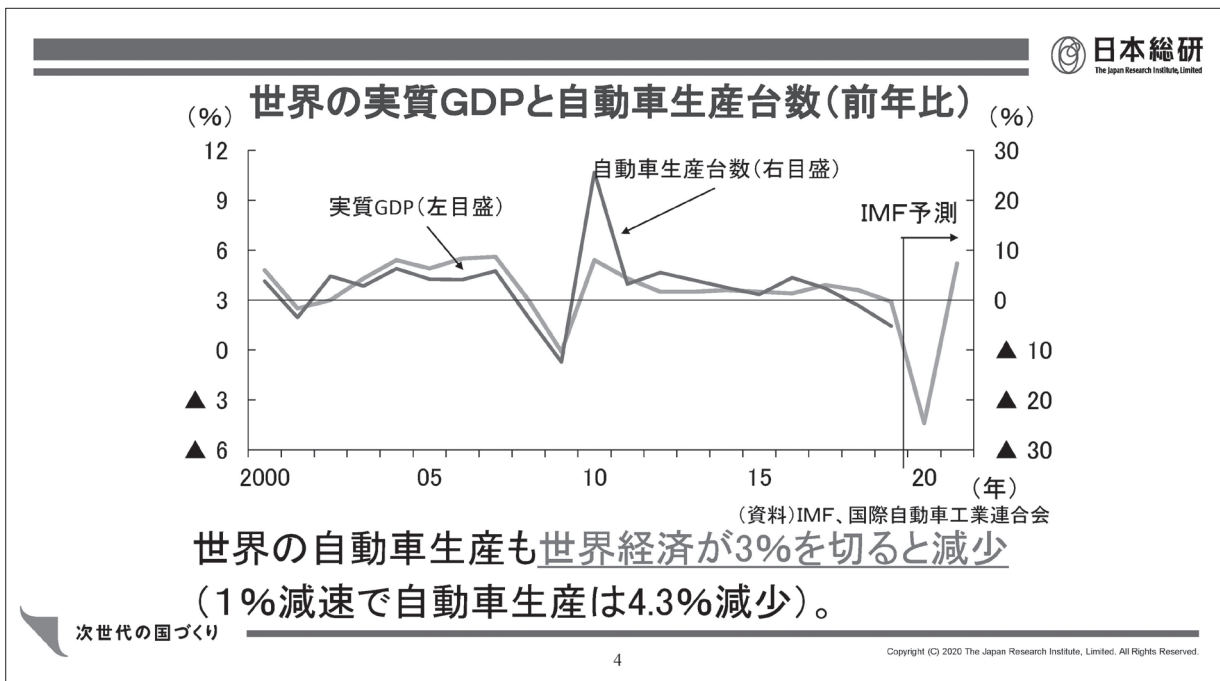
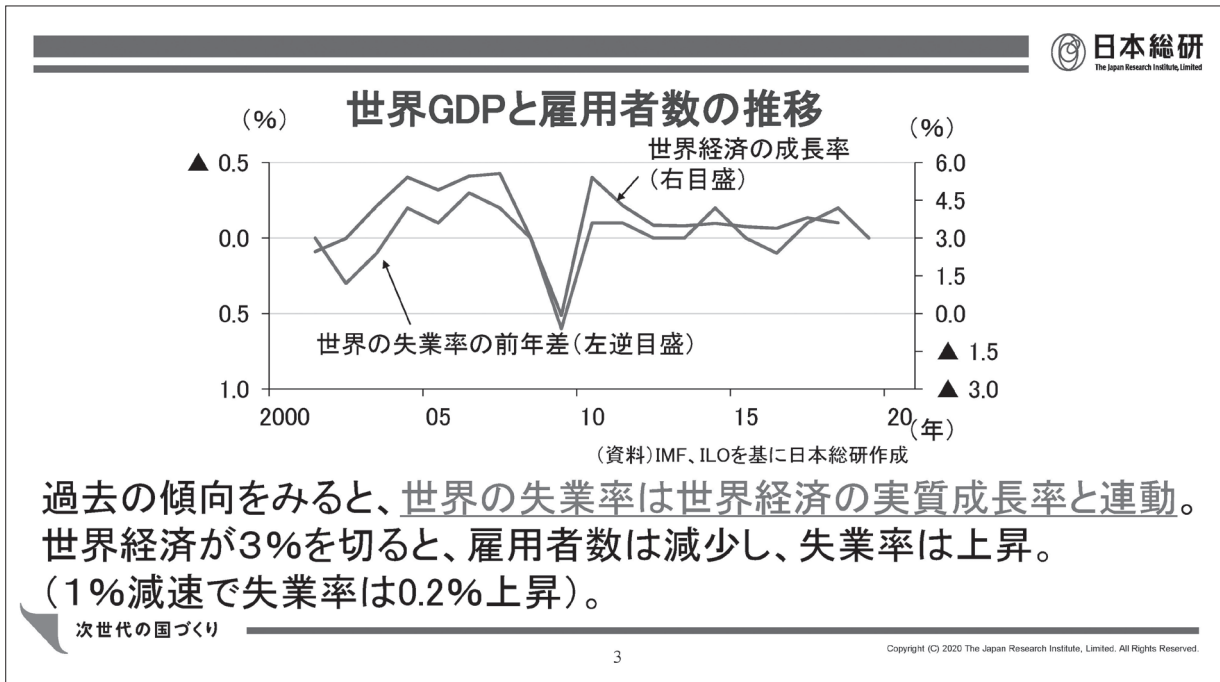
〔世界GDPと雇用者数の推移〕

では、なぜ、3%が景気後退の瀬戸際なのかと言いますと、世界の失業率は世界経済の実質成長率と連動しておりまして、3%を切りますと、雇用者数は減少して、失業率が上昇するというような関係があります。1%減速すると失業率は0.2%上昇するという関係がありまして、やはり3%を維持できるかどうかがとても重要になってきます。

〔世界の実質GDPと自動車生産台数（前年比）〕

もう一つ、自動車生産の台数を見ますと、やはりこれも世界経済が成長率3%を切ると減少していきます。先ほど申し上げました2020年代は平均すると3%程度の成長になる、これを切るようなことになりまして、やはり各国で乱開発をしたり、社会に配慮しないような成長を遂げようとする国が出てくる可能性があります。

これからはそれをさせないためにどうしていくのかということがとても重要になってきます。私は、SDGsの達成を目指した新産業を通じて社会課題を解決し、それが世界の成長率を高めていく。今は3%ぐらいの成長になると言っていますけれども、SDGsの達成を目指した新産業が経済を引っ張っていくことで、世界経済が3.5%とか3.8%とか、以前のペースに戻ってくれば、課題は解決するし、雇用も守られ、経済成長と社会課題の解決といったことも両立できると考えているということでございます。



以上が世界経済についての私の主張でございます。

[2. 関西経済]

さて、そういったなか、関西経済はどうあるべきかという話をさせていただきます。結論から申しま

すと、関西経済は、SDGsの達成を目指した新産業をつくっていった、それを成長力に高めていく。その結果、よく言われる関西経済の地盤沈下というものから脱却していくことが大事だと思います。

実は、1970年の万博から関西経済は地盤沈下したと言われます。後ほど説明いたしますけれども、いろいろなデータを見ますと、大体1970年がピークです。その結果、東京一極集中が加速したということがあります。今あるいろいろな弊害は東京一極集中に起因する部分が多いことを考えると、やはり関西経済にも責任があったのではないかと私は考えています。

では、なぜ、関西経済が地盤沈下したのでしょうか。それは、いろいろ産業はあるものの、それがまだ十分に育ち切っていなかったということがあると思います。そして、近年はインバウンドに頼ってしまった部分が大きかったということは、やはり反省していかなければならないのではないのでしょうか。

さて、よく私たちは万博をいかして地域の成長を高めていくという話をしていきます。では、そのためにどうしていくのか。私は、今申し上げました通り、インバウンド頼みの体制から脱却していった、関西経済を支えていく柱となる産業を三つか四つぐらいつくっていく。それを通じて世の中を、関西経済を高めていくことが大事になると思います。

そのなかでは、候補としては、関西の強みである電子部品・電気機械であったり、医療産業を強化していくことがとても重要になっていくのではないかと私は考えております。その辺についても第二部ではいろいろ議論してまいりたいと考えております。

モデルケースとしてはどういったところがあるのかということで、万博ではいろいろなモデルケースがあります。そのなかで、きょう、皆様にご紹介したいのは、バンクーバーです。バンクーバーは、もともと港湾都市、物流都市でした。しかし、そのままでは自分たちの先行きが細ってしまう、これまで以上に成長できない、そういうふうにかまえて、万博を通じて基幹産業をメタモルフォーゼといいま

2. 関西経済

- 前回万博から地盤沈下。東京一極集中加速。
- 関西地盤沈下の理由：新産業を出せず。インバウンド頼み。
- 万博をいかにして地域の成長に生かすのか：関西の強みである電子部品や医薬産業を生かしていく必要あり。
- モデルケース：バンクーバーは万博を通じて港湾・物流都市からコンベンション・情報都市へ変革

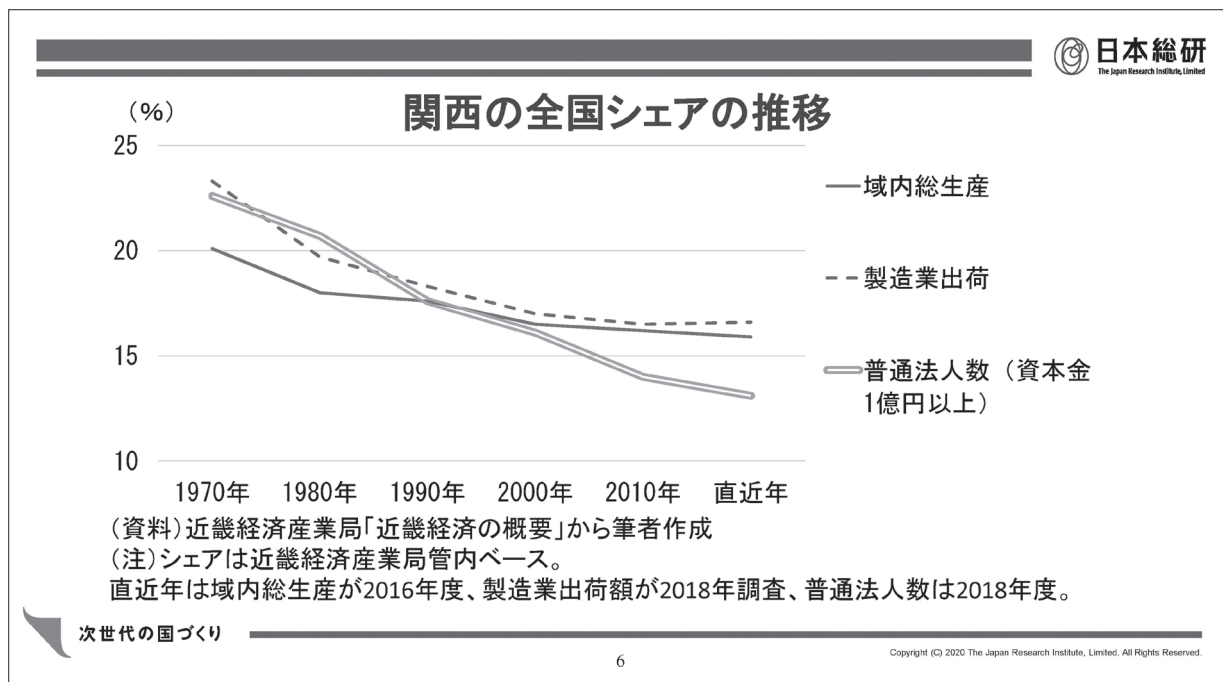
すか、新しいものに変えていったというケースです。彼らは、港湾・物流都市からコンベンション・情報都市へ変革しました。

これは何となく大阪・関西に似ているのではないのでしょうか。もともと港湾都市、工業都市、物流都市でした、とくに大阪は。でも、今、私たちが目指す方向は、情報都市であったり、医療産業都市であったり、MICEを通じたコンベンション都市です。そういった意味では、バンクーバーというのは十分研究に値する都市ではないかと考えております。

〔関西の全国シェアの推移〕

先ほど申し上げました、関西が地盤沈下したという、いわゆるマクロデータです。域内総生産、製造業出荷、普通法人数のグラフをとると、このように、悲しいかな、右肩下がりのグラフになってしまいます。1970年万博、大変成功したのですが、それが次の新産業創出につながらなかったという反省を我々は持たなければなりません。私は、2025年の万博は地盤沈下に歯止めをかける万博になるべきだと考えております。そのための方法についてもこれから議論していきたいと思っております。

昔は、関西は20%経済と言われましたけれども、最近では16%経済と言われます。関西は昔、いろいろなデータをとると、日本全国の20%を占めると言われていたのが、最近では15%程度、16%になっているということです。やはりここに歯止めをかけなければいけない。関西がシェアを伸ばして行って、もう一度20%経済になっていく。それで東京一極集中を是正していくことがとても重要になっていくと思います。その具体策についても、これから第二部で議論していきたいと思っております。



〔大阪・関西のベンチマークは？〕

では、こういった姿を目指せばいいでしょうか。それについて私が問題提起をさせていただきたいと思います。

一つは、バンクーバーを先ほど挙げました。それ以外にも参考となる都市は何個かあります。これは、私が大阪府で所属していました、「万博のインパクトを活かした大阪の将来に向けたビジョン」有識者ワーキンググループという会議で議論したベンチマークです。コペンハーゲン、シアトル、バルセロナ、ピッツバーグ、マンチェスター、ポートランドなどを候補として議論いたしました。

一般的に街づくりのベンチマークを議論しますと、確かに、シリコンバレーを目指そうとか、ニューヨークを目指そうとか、ロンドンを目指そうみたいな話になります。ただ、ここは非常にハードルが高いとは思いますが、例えばコペンハーゲンやシアトルやバルセロナであれば、大阪がちょっと頑張れば十分達成できる街です。そういう意味では、こういった街のよさをどんどん生かして、レベルアップしていくことが大阪・関西にとっても重要ではないでしょうか。

では、こういった都市はどういったところがすぐれているか。時間も限られていますので、ある程度サマライズしてお話しさせていただきます。

コペンハーゲンは、歩行者中心の公共空間、環境先進都市ということで、環境に配慮した都市でもあるし、歩く人にとって生活しやすい都市であるということがメリットとして挙げられます。

次は、シアトルです。産業構造の転換を果たしました。港町から宇宙産業、ソフトウェアへ、未来型の産業に切り替わった。そういったよさがあります。私は、こういったところは重厚長大な部分が多い関西から見ても、産業転換の一つのいい例ではないかと考えております。

次は、バルセロナです。オリンピックを都市の構造改革に活用しまして、スマートシティやIT産業を強化するといった、そういった動きになっております。また、観光産業も非常に強化しています。最近スタートアップ育成にもかなり力を入れているということで、ここもベンチマークとして十分勉強するに値する都市だと思っています。とくにオリンピックというグローバルイベントをうまく生かしたというところで、万博を目の前にしている我々からしても大変心強い具体例であると思っています。

あとは、ピッツバーグです。鉄鋼から医療、ハイテク産業にうまくシフトしました。関西も医療やハイテクに力を入れているという意味では、ピッツバーグ型も十分研究に値します。

マンチェスターは、スマートシティであり、国際空港の活用、さらにライフサイエンスの強化ということで、こちらも非常に関西と親和性が高い。

あともう一つは、ポートランドです。職住近接による、住みたい街全米ナンバーワンとなりました。また、産業構造もうまく転換したということがあります。

そういった意味で、今、我々が目指す世界の成功例がたくさんあります。こういったところを参考に具体的な案を考えていくことがとても重要です。そして、万博をゴールにするのではなくて、万博を通過点にして、2030年、2040年、2050年の成長戦略を考えていくことがとても重要になるのではないのでしょうか。この辺についても後半で議論していきたいと思っております。

大阪・関西のベンチマークは？

	特 徴
コペンハーゲン	歩行者中心の公共空間、環境先進都市
シアトル	産業構造の転換(港町→宇宙・ソフトウェア)
バルセロナ	オリンピックを都市の構造改革に活用、スマートシティ、産業構造の転換(繊維→IT)
ピッツバーグ	産業構造の転換(鉄鋼→医療・ハイテク)
マンチェスター	スマートシティ、国際空港の活用、産業構造の転換(繊維産業→ライフサイエンス)
ポートランド	職住近接による「住みたい町全米1位」、産業構造の転換(農林業→環境ビジネス、ソフトウェア)

次世代の国づくり

7

Copyright (C) 2020 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

〔3. 2025年大阪・関西万博〕

さて、そういう大きなグランドピクチャーのなか、2025年、大阪・関西万博はどうあるべきでしょうか。ここについて、私なりの意見を申し上げさせていただきたいと思います。私は、今回の万博は歴史的な万博になってしまったと思います。「なってしまった」という言い方をしました。なぜか。それはコロナがあったからです。コロナがある前は普通の万博だったかもしれません。しかし、コロナがあった今、2025年万博というのは、コロナ後の未来像を示すという、ある意味、歴史的使命を帯びたと考えるべきではないでしょうか。

来年も万博はあります。ドバイです。しかし、来年、あと1年で、これからポストコロナの理想像を示すというのは少し時間不足のような気がいたします。ところが、2025年には、あと4年と半年ぐらいあります。ポストコロナとはどういう世界かということについて、十分我々は議論ができるわけです。とくに大阪・関西は1970年万博の成功体験があります。そのときの成功体験とうまく合わせていけば、十分ポストコロナの理想像を示せると思います。そういった意味で、我々は歴史的な万博になったということの重大性を考えていかなければならないと考えています。

では、ポストコロナの理想像とは何でしょうか。それは、まさにSDGs達成の必要性を高らかに世界中にアピールすることだと思います。SDGsをどうやって達成するのか。そこは私の後の問題提起のなかで掘り下げていくので、ここでは深く言及いたしません。やはりそういったことを帯びたということなので、我々はSDGs達成をどうしていくべきか。それを本気の気持ちでやっていくということのアピールしていくことがとても大事になると思います。

そして、1970年万博の「人類の進歩と調和」とは、ある意味、SDGsの概念だと思います。そういう意味で、このSDGs万博である2025年万博は、人類の進歩と調和をいかに現代化していく、令和の世界

に合わせていく、21世紀の社会に合わせていく万博にしていくべきであり、そういったことを考えていく歴史的な万博になると考えています。これからも皆さんでこういうことを議論していきたいと思っています。

3. 2025年大阪・関西万博

○今回の万博は歴史的な万博

○ポストコロナの理想像を初めて示す万博

➤SDGs達成の必要性を高らかに示す

○「人類の進歩と調和」をいかにバージョンアップさせるのか

〔大阪・関西万博は「矛盾や対立事項との共存」を目指せ〕

では、具体的にどういった万博を目指せばいいのか、私なりの問題提起をさせていただきたいと思います。

一つは、オンラインとオフラインの融合です。ここにも書いてあります通り、矛盾や対立事項との共存です。例えば、今、我々はシンポジウムをオンラインでやっていますが、コロナが落ち着いてきたら、やはりオフラインをうまく使っていくという発想もしなければいけないと思います。オンラインの対立概念としてオフラインを考えるのではなく、そのよさを融合していくことが大事だと思います。

2025年の万博、2,800万人の来場者を目指しています。その一方で、世界中から80億人の参加者も募っています。これは両立できます。ですので、世界中からオンラインで楽しめる人がいる一方、あ、大阪に行きたい、日本に行きたい、関西に行きたいという人にどんどん来てもらう。そういった形でオンラインとオフラインを融合していくことがとても重要になると思います。

あともう一つは、ビフォーコロナとポストコロナの融合だと思います。ポストコロナの世界を見せただけではなくて、ビフォーコロナの世界で一体何を残していくのか。そういったこともアピールする必要があるのではないのでしょうか。関西はすごく歴史の長い地域です。やはり歴史と未来がうまく融合するから、この大阪でやる万博は盛り上がるのではないのでしょうか。そういう意味で、ビフォーコ

ロナとポストコロナを融合していくことがとても大事です。

その次が人間と機械の融合です。万博は2025年にやりますが、イメージするのは2050年、2100年の世界です。シンギュラリティの世界まで展望する万博です。そういう意味では、人間と機械をどう融合していくのかということが大事です。

更にもう一つは、事前と事後。一つの例として医療を挙げますと、これまで病気を治すことばかり考えていました。でも、予防していけば、もっと病気が起こらないということも考えられます。ここも矛盾をするのではなく、どう融合していくのかということがとても大事です。もう一つ大事なことは、今度の万博はいろいろなデータが集められます。データサイエンスがどんどん進んでいきます。そのときには、効率を求めるだけではなくて、どうしたらプライバシーも守られるかということが大事です。プラットフォームの議論や、デジタルレーニズムという言葉もありますが、そういったものに負けないような効率とプライバシーが両立する万博というものをつくっていく必要が私はあるのではないかと思います。

そして、今回の万博はSDGsです。成長と社会課題の解決、これが実現することで未来社会は夢がある。また、夢洲でやる以上、夢があるということをアピールすることが大事だと思います。



大阪・関西万博は「矛盾や対立事項との共存」を目指せ

- ① オンラインとオフラインの融合
- ② ビフォアコロナ(歴史)とポストコロナ(未来)の融合
- ③ 人間と機械(シンギュラリティ時代の人類の進歩と調和)
- ④ 事前と事後(治療と予防医療)
- ⑤ 効率とプライバシー
- ⑥ 成長と社会課題の解決

次世代の国づくり

9

Copyright (C) 2020 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

〔結論〕

最後に結論を申し上げます。今度の万博を通じて関西はSDGs先端都市となる。そして、それが関西経済復活の道であり、そして東京一極集中を是正し、日本、世界を盛り上げていく。そういう地域になるべきだというのが私の問題提起でございます。

私のプレゼンは以上です。どうもありがとうございました。

結 論

万博を通じて関西はSDGs先端都市となる。
そしてそれが関西経済復活の道である。